

|                  |  |
|------------------|--|
| Title            | カロザスの経歴と人柄   |
| Sub Title        | On the life and personality of C. Carrothers   |
| Author           | 會田, 倉吉 (Aita, Kurakichi)   |
| Publisher        | 三田史学会  |
| Publication year | 1958   |
| Jtitle           | 史学 Vol.30, No.4 (1958. 3) ,p.16(432)- 38(454)  |
| JaLC DOI         |  |
| Abstract         | C. Carrothers became a faculty member of Keio Gijuku in Jane, 1872 (the fifth year of Meiji) and taught there for one year. He was a Presbyterian minister and a graduate of the University of Chicago. He came to japan in 1869 and lived in the Tsukiji Concession in Tokyo. His missionary work resulted in the organization of the Japan Presbyterian and Tokyo Presbyterian Chur-ches. He was also very much interested in educationg young Japanese people and opened a school. In 1876, he retired from his church, and was asked by the Ministry of Education to teach in various places, including Hiroshima and Osaka. However, the last years of his life is not very Well known. In this Article, the writer intends to introduce the life of C. Carrothers and the comments on his personality given by the persons who had contact with him. |
| Notes            |  |
| Genre            | Journal Article  |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19580300-0016">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19580300-0016</a>  |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## カロザスの經歷と人柄

會 田 倉 吉

- 一、カロザスに關する諸文獻
- 二、カロザスの出生、學歷等
- 三、來朝後のカロザスの動靜
- 四、カロザスの人柄

### 一

明治五年六月慶應義塾が雇入れた最初の外人教師カロザスについては、さきに本誌上（「史學」第三十卷第三號、昭和三十三年十二月刊）にその義塾への雇入れの経緯を述べておいたが、それからだけでもすでにかれの國籍がアメリカ合衆國であること、それもオハイヲ（オ）州出身の宣教師で、當時三十二才であつたことぐらいはわかつた筈である（同誌に紹介した雇入れ「契約書」、「約束書」、「私學明細表」、「私學慶應義塾開業願」等参照）。しかし、本稿ではもすこしこれをその略歴や人柄等にわけ詳述してみたい。

ただ、それについては、すでに小澤三郎氏の詳細な論稿二編——「序說カロゾルスと慶應義塾」（「明治文化」第十五卷第六號、昭和十七年六月刊、二九——三〇頁所載。因みに、これの筆者名は安部球也となつてゐるが、ほかならぬ小澤氏の筆名だそう

である)、「慶應義塾御備教師Cカロゾルス」(同誌第十六卷第十號、昭和十八年十月刊、七——一八頁所載)が公けにされているし、それからこれほどには詳細でないまでも、特にカロザスだけにつき項目をあげて記しているものとして、まだ荒正人・村上政之編「世界人名百科辭典」(昭和二十六年八月五日刊、一七〇頁、カロザース)、岩波「西洋人名辭典」(昭和三十一年十月十六日改訂版、三七九頁、カロゾルス)等の人名辭書や、櫻井匡著「教派別日本基督教史」(昭和八年十二月二十八日刊、五二——四頁、第一編、二、第一章、第四節カラゾルス)などを数えることが出来るし、その他多くの日本近代キリスト教史關係書、同教關係諸學校史、同時代の人々の若干の傳記類等々にまでしばしばその消息動靜は散見される。

現に、差當つて筆者の眼にふれたところでも、それは左のごとくである。

山本秀煌編「日本基督教會史」(昭和四年十月十日刊、「日本基督教會略史」前編に七年後編集の後編を合して一本とせるもの)、一〇、一六、三九、四一、四三、六一、六三、六四、六五——六、七五、七九、一五八(夫人關係記事)、四九九、附一四頁。比屋根安定著「日本基督教史要」(昭和七年八月二十日刊)、一三〇、一三三、一四三頁。同著「日本近世基督教人物史」(昭和十年十月二十五日刊)、一四〇、一四四、一四七、一五一、一五二、二二四、二二五(夫人)、二七一、三二三頁。同著「日本基督教史」第四卷(昭和十四年七月十日刊)、一四九、一五三、二一二、二四五、二四六頁。小澤三郎著「幕末明治耶蘇教史研究」(昭和十九年十二月十日刊)、三三二、三六一——三七〇頁。

鷺山第三郎著「明治學院五十年史」(昭和二年十一月三日刊)、七、八、年表三頁。山本秀煌編「フェリス和英女學校六十年史」(昭和六年二月十一日刊)、年表四(夫人)頁。梅花女子專門學校・同高等女學校創立六十年史編纂委員會編「創立六十年史」(昭和十二年五月一日刊)、「附錄一、歷代校長略傳」のうち「第五代校長長田時行先生」の項、二八三頁。田村光編「女子學院八十年史」(昭和二十六年四月一日刊)、特に夫人について——五、三八、三九、六二、六三、六四、六五、一〇〇、三三二、三三三、三三四、三五一

頁。

故伊澤先生記念事業會編纂委員編「樂石伊澤修二先生」(大正八年十一月十日刊)、一七頁。馨光會刊「都筑馨六傳」(大正十五年八月二十日刊)、二九——三〇、年譜五——六頁。佐波亘編「植村正久と其の時代」第一卷(昭和十二年十二月十日刊)、二六五頁、第二卷(昭和十三年二月二十五日刊)、一七二、一八二、一八三、五〇七、五〇八(夫人)頁、第三卷(昭和十三年四月二十八日刊)、四六八、四七一、六五四、六六三頁、第四卷(昭和十三年六月二十八日刊)、七六、八一、八二、八三、八四、八八、八九、九四——五(夫人)、九六、九九、三四二、三六二頁、第五卷(昭和十三年九月十八日刊)、四七三、四八〇、五〇〇、六三九(夫人)、六四一、六四三、六四五、九八五、九八八頁。若木雅夫著「厚生保護の父原胤昭」(昭和二十六年九月二十日刊)、二六、年譜一頁等々。

或は「東京市史稿」港灣篇第三(大正十五年九月五日刊)、六六二頁。宮武外骨編「明治史料」(昭和二年十月十日刊)、四一頁(明治六年四月「東京新報」第八號所載、耶蘇教書肆開店の記事)。吉野作造編「明治文化全集」第十一卷宗教篇(昭和三年九月十五日刊)、五五六頁。矢吹慶輝編「外人の觀たる日本國民性」(昭和九年二月十五日刊)、附四〇三頁。石井研堂編「增訂明治事物起原」(昭和十一年七月一日刊)、二五〇頁、同改訂增補版、上卷(昭和十九年十一月十八日刊)、五五〇(夫人)頁。豐田實著「日本英學史の研究」(昭和十六年四月三十日刊、改訂版)、七〇——二頁。東京都史紀要第六「東京開市と築地居留地」(昭和二十五年十一月刊)、附表A、八頁。開國百年記念文化事業會編「明治文化史」6宗教編(昭和二十九年三月五日刊)、二九一、二九二、年表五四四頁、3教育道德編(昭和三十年六月十五日刊)、二二九頁、1概説編(昭和三十年十月二十八日刊)、三五九、三六二頁。

さらにまた、慶應義塾及び義塾關係者に關連あるものとしては慶應義塾編「慶應義塾五十年史」(明治四十年四月二十一日刊)、一二〇、一二二——三、一三〇——二、一三八頁。同編「慶應義塾七十五年史」(昭和七年五月九日刊)、八〇、八一——二、八六頁。同編「續福澤全集」第六卷(昭和八年十月三十日刊)、四一六頁(明治六年七月二十日附中上川彦次郎宛福澤書翰。「中上川彦次郎先

生傳」、六〇二頁等にも收録)。

同塾機關誌「三田評論」所收のいくつかの懷舊談——第二二三號(大正五年二月刊)、六——一二頁所載、須田辰次郎「余の在塾中に於ける珍談奇聞」、一〇頁、第二二九號(大正五年八月刊)、四四——六頁所載、後藤牧太「義塾懷舊談」、四六頁、第二三五號(大正六年二月刊)、五〇——二頁所載、須田辰次郎「義塾懷舊談」(四)、五一頁、第二五八號(大正八年一月刊)、六五——九頁所載、栗本東明「義塾懷舊談」、六九頁。

慶應義塾基督教青年會編「慶應義塾基督教青年會三十年史」(昭和三年十二月二十五日刊)、四五——六、二三三頁。石河幹明著「福澤諭吉傳」第一卷(昭和七年二月十日刊)、七七二、七七九——七八〇、七八三頁、第四卷(昭和七年七月十五日刊)、六〇頁。日本力行會出版部編「現今日本名家列傳」(明治三十六年十月三十日刊)、「齒科醫高山紀齊君」の項、三一五頁。三宅米吉・下村三四吉編「高嶺秀夫先生傳」(大正十年十二月二十日刊)、二八——九頁(「慶應義塾五十年史」、一二二——三頁からの引用)。加藤木重教著「重教七十年乃旅」前篇(昭和三年九月十五日刊)、五四——五頁。村田昇司編「門野幾之進先生事蹟・文集」(昭和十四年十一月二十三日刊)、一三六——七、二七八——九頁などがある。

そして、なかでも小澤氏の「慶應義塾御傭教師Cカロゾルス」に紹介された謀者報告「東京邪宗事情」(明治五年正月)、「東京横濱邪宗門事情書」(明治五年八月上旬)、「東京横濱耶蘇教事情書」(明治五年十月)、「鐵砲(炮)洲六番書庫日誌」(明治六年四月三十日)(これは同氏の前掲著書「幕末明治耶蘇教史研究」三六一——三七〇頁中にも全文收録す)とか、山本秀煌氏の「日本基督教會史」に引用される長老會記事とかはきわめて貴重であるし、直接かれに接した人々の話を録した「信仰五十年史」(田村直臣、これは本稿執筆までに原本をみる機会を得なかつたけれど、必要の記事は前記小澤氏の論文の中に引用されている)、「東京傳道昔日譚」(原胤昭、明治三十四年「福音新報」第三〇一號所載。「植村正久と其の時代」第二卷、一八一——三頁收

録)、「私と基督教」(同、「新舊時代」第一卷第八號、大正十四年十月刊、七——一〇頁所載)、「基督教古文獻賣出し時代の思ひ出」(同、昭和七年六月九日「福音新報」第一九一五——一九二〇號所載)。「植村正久と其の時代」第四卷、七〇——九八頁收録)、「重教七十年乃旅」前篇(加藤木重教)、「初めて聖書を見たり」(同、「慶應義塾基督教青年會三十年史」、四五——七頁所載)。「植村正久と其の時代」第五卷、九八六——八頁にも收録)とか、或は田中館愛橘の談話(「門野幾之進先生事蹟・文集」、一三六——七頁参照)、「三田評論」所收の諸懷舊談や、「母の手記より」(小坂花子、「女子學院八十年史」、六四——五頁所載)とかは、時にはいたつて斷片的ながらもまた結構興味深い資料であり、加うるに、さきの拙稿(「慶應義塾のカロザス雇入れについて」)にも言及した東京都政史料館藏の諸資料——「明治九年外國教師雇等五件」に含まれている「明治五年壬申從十月外國人教師雇入免狀領收簿」はじめ、その他「明治九年外國教師雇等五件」等も決して忘れてはなるまい。  
「明治九年外國教師雇等五件」  
自明治十年府下居住外國人明細表甲、乙、「明治十六年私雇外國人管理錄件目」下  
至十一年

## 二

そこで、以下それらを綜合しながら、まずかれの經歷につきなるべく年譜風な整理を試みてみることにする。

**姓名** クリストファー・カロザス (Christopher Carrothers)

このカロザスの名の表記の仕方は實に千差萬別で、たとえば慶應義塾がかれを雇入れた際の契約書でさえが「慶應義塾五十年史」掲載のものと「同七十五年史」のものともう相違し、前者(一三〇——二頁)にはカロザー、後者(八二頁)にはカロザスとなつてゐるし、このほか筆者の書きとめておいた限りでも、およそ十八種——カロザス、カロ

ザース（ズ）、カrolザス、カロザー、カロザ、カロゾ（ソ）ルス、カロツ（ツ）ルス、カロゾロス、カローザル、カラザルス、カラザア（ー）ス、カラゾ（ツ）ルス、カラゾル、カルゾルス、カルサス、カルロザス、カルロテ（デ）ス、カルデス等に及び、あまつさえ、漢字でも嘉魯日耳士、嘉魯日爾士、嘉魯日耳斯などと記されている。けれども、それらはいわずもがないずれもここにいうカロザスその人をさし、かれの著譯書（これについては機會を改めて詳述したい）によれば、漢字は嘉魯日耳士が用いられ、また普通C・カロザスとのみいわれているものが（CHRISTOPHER CARROTHERS）であることも、その藏印で明らかである。（Christopher をまがりなりにも「キリストヘル」としたためたものは、前掲拙稿に寫眞を載せておいた明治六年一月二十二日附の雇入免狀請取ぐらいに過ぎない）。

なお、本稿がこのまちまちな呼稱をあえてカロザスと記すのは、これまでにかかげた慶應義塾の記録類にしばしばそうみられるため、便宜それを使用したまでで格別の意味はない。むしろ、正しくは岩波「西洋人名辭典」にあげるようにカロザーズとでもすべきか。

**出身地** アメリカ合衆國、オハイオ州

このことはこれも前掲拙稿に載せた雇入れ「約束書」の末尾の記載のほか、諜者報告「東京邪宗事情」や同じく「鐵炮洲六番書庫日誌」等に次のごとく報ぜられているのもうかがわれる。

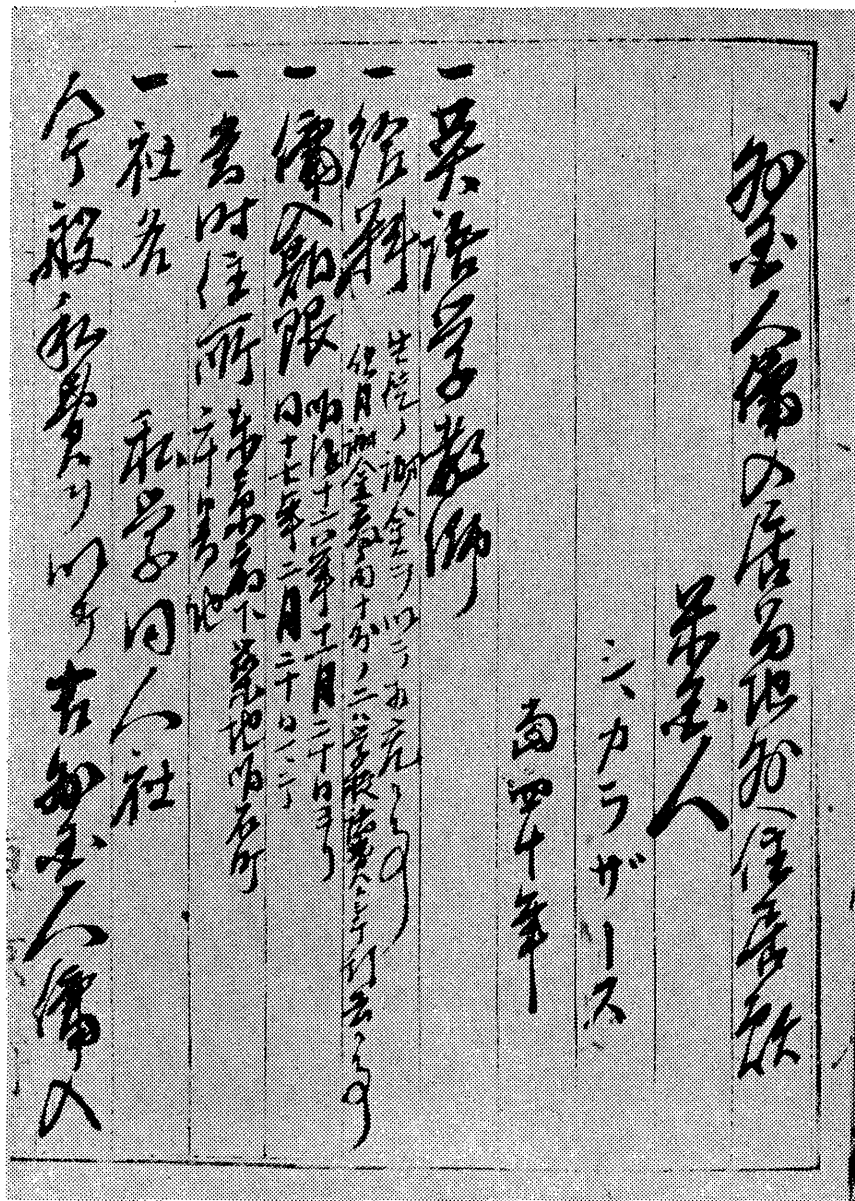
一 築地居留カルロデス 亞米利加ヲハヤロ産 四年前ヨリミシシヨナリー 法教ヲ弘ムル爲ニ外國ニ送ル人ノ名 トシテ日本ニ來東京ヲ住所トシ云々

（「明治文化」第十六卷第十號、一五頁）

今般美國オハヨー産耶蘇教ヘレスヒテレヤン宗ノ教師カルロテス鐵炮洲六番地ニ耶蘇教書肆ト號シテ一石庫ヲ創建

シ三月十七日店ヲ開キ云々（「幕末明治耶蘇教史研究」、三三二及び三六一頁）

生年月日 ？——一八四〇年（天保十一年）五月乃至十一月又は一八四三年（天保十四年）頃

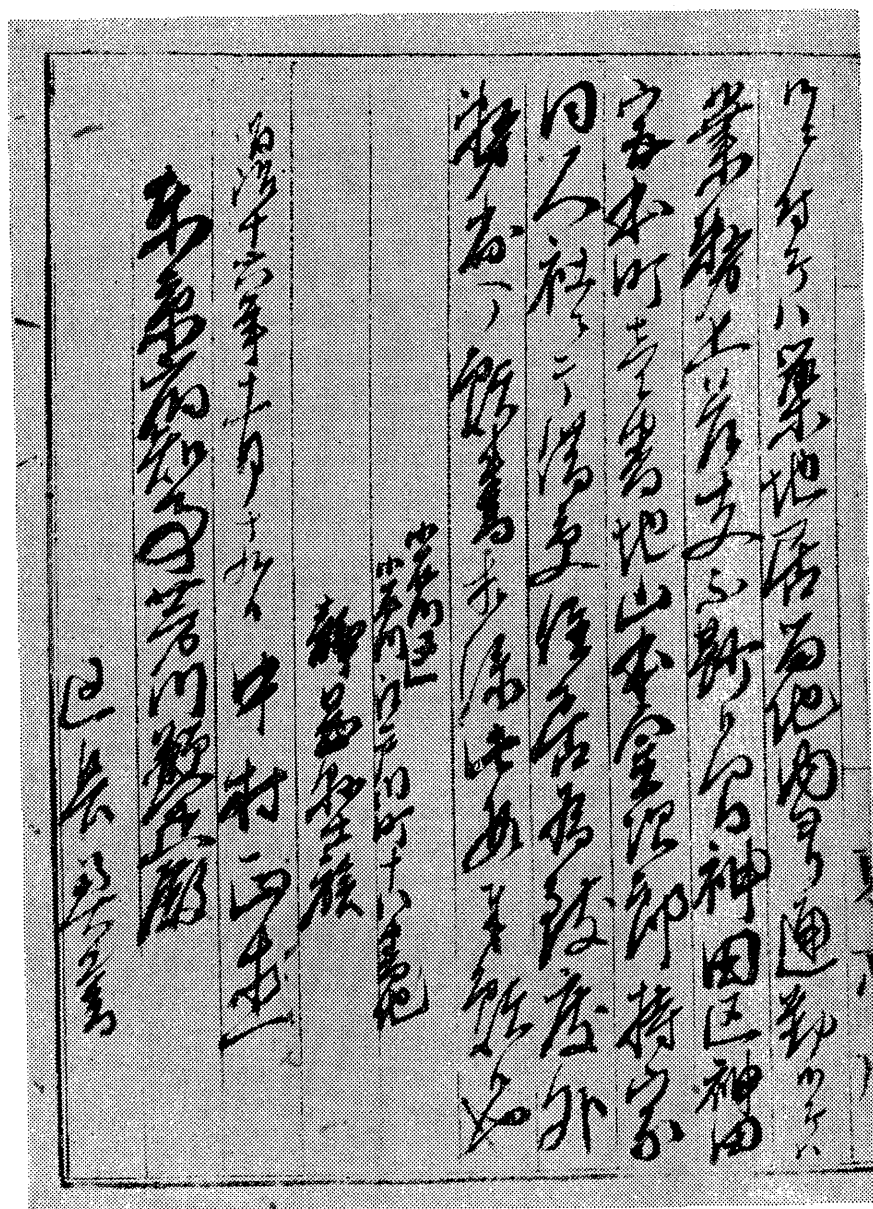


カリザス雇入居留地外住居願

（東京都政史料館蔵「明治十六年私雇外國人管理録件目」下のうちの第四十七號書類「中村正直米國人シ・カラザース雇入開市場外住居ノ願書下戻願ノ件」所收）

これは實はなんの頼るべき資料もなく、まことに不正確なものではあるが、前記「私學明細表」（明治五年十一月）や「私學慶應義塾開業願」（明治六年四月）にある三十二才というのを一應みとめ、それも年が改まった後も相かわらず三十二才とあ





前 同 (つづき)

る點から、今日のような満  
令計算によるものとしてそ  
れを逆算すれば、大體一八  
四〇年(天保十一年)五月乃  
至十一月といった年月が  
(嚴密にいえば陰陽兩曆のこま  
かい對照の問題もないではな  
いが)出てこよう。ところ  
が、東京都政史料館藏の「  
明治十六年私雇外國人管理  
錄件目」下のうち、同人社  
の中村正直がこのカロザス  
を雇入れようとしてやめた  
ときの書類(第四十七號)の

一つに「外國人傭入居留地外へ住居願」(寫眞参照)なるものがあつて、そこには「外國人シ、カロザス 當四十年」  
とみられ、これが明治十六年(一八八三年)十一月十九日附である。これではまさに三年からのひらきが出來てしまう

し、ましてや、もしこれを數え年とでもするならば四年からの差が生じて来る。頼りないというほかあるまい。

**學歴** 一八六七年（慶應三年）舊シカゴ大學（Old University of Chicago）卒業、バチエラー・オブ・アーツ

これにつき、筆者のこれまでにみかけたものは「福澤諭吉傳」第一卷（七七九頁）、「慶應義塾七十五年史」（八六頁）等にかれを「シカゴ大學の卒業生」と記しているばかりで、その確かなことはわからなかつたし、それもおそらくは義塾でかれに教えをうけた須田辰次郎あたりの談話（「三田評論」第二二三號、大正五年二月刊所載、「余の在塾中に於ける珍談奇聞」）に「カロザスは確か米國シカゴ大學の出身で、云々」（同、一〇頁）とあるのなどがもとではないかとも察されるが、このたび特に慶應義塾大學教授、外事部長清岡暎一氏を通じて同大學宛照會していただいたところ、昭和三十三年三月二十七日附の左のごとき回答に接した。それにより、右確認し得た次第である。

クリストファー・カロザス氏は一八六七年舊シカゴ大學を卒業し、バチエラー・オブ・アーツの學位を取得した。

その大學は現在のシカゴ大學とは別のものである。最初のシカゴ大學は一八八六年に閉鎖したのであつた。のちに、その名稱は舊シカゴ大學（Old University of Chicago）とかわつてゐる。現在のシカゴ大學というのは一八九二年以前にはなく、この時舊大學のバチエラー號所有者は評議員會により新シカゴ大學の卒業生と見做されることとなつたのである。遺憾ながら、舊シカゴ大學の記録が不完全なので、ここにはカロザス氏が卒業して學士號を與えられた事實だけしか報告出来ない。

**來朝とその使命** 明治二年六月（一八六九年七月）横濱に到着。米國長老派——Presbyterian Church in the

United States (North) 教會から宣教師として派遣されたものである。

明治二年のカロザス來朝については「世界人名百科辭典」、「西洋人名辭典」、「教派別日本基督教史」その他の諸書が一致して記すところであり、前掲の明治五年正月の諜者報告「東京邪宗事情」に「四年前ヨリミシヨナリー法教ヲ弘ムル爲ニ外國ニ送ル人ノ名 トシテ日本ニ來云々」とあるのも全くこれと符合するわけであるが、わけても小澤氏の論文（「慶應義塾御傭教師Cカロザルス」は冒頭にまずこのことを説き、それも註記して右がフルベッキ (Rev. G. F. Verbeck) の著書 *History of Protestant in Japan.* に基<sup>づく</sup>ことをいっている。そういえば、「日本基督教會史」(一〇頁)が特にプレスビテリアン教會のカロザス夫妻横濱來朝を明治二年六月(陽歷七月)と報じているのなどもおそらく典據は一つと思われるので、ここでは主として小澤氏の記載をとることとした。宣教師のことももとより同様で、これも前述したかれの著譯書の藏印に姓名に先立ち REV. と記す、それこそつまり Reverend にほかなるまい。

それに、かれがプレスビテリアン派の宣教師であることは、さきに引用した「鐵炮洲六番書庫日誌」に「ヘレスヒテレヤン宗ノ教師カルロテス」とあるのがとりも直さずそれを示すものであり、「福澤諭吉傳」第一卷(七七九頁)や「慶應義塾七十五年史」(八六頁)でもすでに知られているところで、いまださういふほどのこともなからう。

### 三

次に、來朝後のかれの動靜であるが、これは別にいつかかれの事績について一通り書いてみたいと思つていたので、當然それと重複してくることが少くないであろうが、話の順序として一應述べておく。

明治二年八月 東京にうつつて外國人居留地築地六番屋敷に住み、間もなく塾をひらく。

小澤氏は右論文中にカロザスが横濱について二ヶ月後東京に移轉したことを述べ、「日本基督教會史」も「カロゾルス夫妻横濱に來り二ヶ月にして東京に移る。」(一〇頁)と記す。即ちカロザスの來朝は六月であるから、それから二ヶ月後の東京移住は明治二年八月ということになる。そして、東京におけるかれの住居は當時居留地外居住のやかましかつた折柄當然居留地に限られたわけで、そのことはこれまでに紹介した諸資料(慶應義塾雇入れ「約束書」の末尾や「東京邪宗事情」、「鐵炮洲六番書庫日誌」等の前掲引用文)でもはや明らかであるし、さらに「東京市史稿」港灣篇第三、六六二——三頁間に挿入の圖面によれば、その鐵炮洲の海岸寄りほぼ中央邊に位する「六番」(三百七十九坪七合)に「トムソン」とこの「カロゾロス」の名が記されており、「東京開市と築地居留地」附表Aにも明治九年現在の住居「居留地六番地」とある。カロザスはここに「美々敷宅ヲ造リ」(明治五年正月「東京邪宗事情」)住んでいたものといわれ、かれの弟子の一人原胤昭はその模様を懷舊談「基督教古文献賣出し時代の思ひ出」のうちにこう語っているのである。

外國人居留地築地六番屋敷、これが日基派の宣教師カロゾルス氏が建設した、我らには眼新しい西洋館。今は魚河岸になつた海岸地である。其頃は立派に見へたが今で見るとブラック見たやうなもの。館は東向き角より北へ並び四五間に六七間の平家建の棟が、日曜日集會の會堂であり、平日はカ夫人の英語教場であつて、室内は履き込みの板床、五尺長の腰掛けが並べられてあつた。云々(「植村正久と其の時代」第四卷、七六頁。なお、同八一頁には寫眞を掲ぐ)。

また、「鐵炮洲六番書庫日誌」の前掲引用文に、カロザスが同地に耶蘇教書肆と號し一石庫を創建、三月十七日より開店したとあつた、それは明治六年四月發行の「東京新報」第八號に載つた耶蘇教書肆の記事(「明治史料」、四一頁所收)のそれにほかならず(ただし「明治史料」には七番地となつてゐる)、原の懷舊談によると、「南西に面して、横町に並べて、頑牢な石庫、一尺角の伊豆石を以て築きあげたもの」(同前)。つまり「鐵炮洲六番書庫」というのがこれで、「二間に三間位な二階藏、火を恐れて戸前口を小さく低

く、カ氏の身丈けでは幾度も頭を打った。」(同、八一頁) 程度の規模をもち、明治六年三月十七日に店開きしたわけで、譯者正木護は桃江正吉と偽稱し、この責任者となつて入りこみ、その間明治六年三月二十六日から同年四月三十日までの日誌がつまり右の資料なのである。

これで、とにかく、カロザスが東京移住後少くとも明治九年ごろまでは築地六番地に居住していたことが察しられよう。他方、やはり「鐵炮洲六番書庫日誌」の報告(明治六年四月十一日の項、次項引用文参照)によると、かれが慶應義塾在任中、雇主福澤のもとに教師の家がつくられることになり、そうすれば、かれは妻と一緒に早速そこに引越して自分の家は借家とし、たいそうな家賃をむさぼるつもりらしいといった記事もみられるけれど、これはどうも實現はされなかつた模様で、カロザスの三田山上義塾構内居住の證據はなにもない。むしろ、下つて明治十六年十一月同人社との間に雇入れの話のあつたとき、當時の住所が「東京府下築地明石町二十番地」となっている(前掲寫眞の東京都政史料館藏資料参照)。

ついで、開塾云々のことは「教派別日本基督教史」(五三頁)によると、東京へ來てから築地島原に學校を開いて青年たちに英語を教え、のちまた築地六番に女學校をおこして大いに育英事業につくしたとあり、「日本基督教史要」(一三〇頁)、「明治文化史」概説編(三六二頁)等はこれを明治二年まず築地に英學校や女學校を建てたと書き、「女子學院八十年史」(三八、六三頁)には明治二年カロザスのもとに學ぶ男生徒にまじつて通學する一人の娘があり、その熱心さにほだされて翌三年カロザス夫妻築地明石町に女學校を創設すと記す。次に述べる「A六番女學校」がそれで、これ以前にもう塾のようなものあつたことがうかがわれよう。

**明治三年** 築地明石町A六番館に夫妻(往々夫人とだけ記す)による女學校開校。A六番女學校と稱し、實に東京における女子教育の濫觴で、明治九年春まで存続、ひいては現在の女子學院の前身をなす。

右の「女子學院八十年史」の記事はじめ、「日本基督教會史」(一六、一五八頁)、「植村正久と其の時代」第五卷(六三九頁)等參

照。「日本基督教會史」年表ではこれを明治二年の項にかかげるも、同書本文では三年とし、同じ山本秀煌著「フェリス和英女學校六十年史」年表でも三年になつてゐる。このほか、「都筑馨六傳」(三〇頁)では明治五年八月夫人築地萬年橋に女學校をひらいたといひ、「増訂明治事物起原」(二五〇頁)ではこの築地萬年橋の女學校は五年九月の新築開校と記す。それに、廢校の年も後述のごとく「女子學院八十年史」年曆(三三四頁)には明治八年としてあるが、しかし、ここでは一應「西洋人名辭典」に一八七〇年(明治三年)から七六年(明治九年)まで夫人とともに築地A六番女學校を經營したとあるのによることがしよう。

**明治五年六月一日** 慶應義塾に雇入れられ、翌六年七月まで勤務(詳細拙稿「慶應義塾のカロザス雇入れについて」参照)。  
**同年八月朔日** 築地に建立した禮拜堂の献堂式を舉行。

「東京横濱邪宗門事情書」によると、

一 八月朔日築地居留カルロデス建立セシ耶蘇禮拜堂ニ於テ開教ノ式アリ (中略) 福澤塾ヨリ來ル者丈二十餘云々(「明治文化」第十六卷第十號、一五頁)

とあり、慶應義塾の生徒も相當數それに參加したらしい。

**同年八月二十日乃至二十六日** 日本基督公會第一回宣教々師會に出席。

「日本基督教會史」(三九頁) 参照。同じくこれを「日本近世基督教人物史」(一四〇頁)には明治五年九月のこととしてあるが、それは同著者の「日本基督教史」(一四九頁)において「明治五年の陽曆九月」と書きなおされている。

**同年十月十五日** 學校を建ててこの日より開講、毎日バイブルを教授。書庫をも普請中。

次項に引用の「東京横濱耶蘇事情書」参照。「都筑馨六傳」(三〇頁)に八月夫人が萬年橋に女學校をひらいたのにつづき、同年十月さらに男子にも英佛獨語を教授することになつたとあるが、或はこれにあたるか。普請中の書庫とはもちろん既述の鐵炮洲六番

書庫をさし、翌六年三月十七日店開きしたことになる。

**明治六年春** 築地入舟町に築地大學を創立、同九年春までつづく。

「教派別日本基督教史」(五三頁)、「日本基督教史要」(一三〇頁)、「日本近世基督教人物史」(一五一、二二四頁)、「女子學院八十年史」年曆(三三三頁)、「明治文化史」概説編(三六二頁)、同宗教編年表(五四四頁)、「西洋人名辭典」等参照。

なお、この築地大學というのは明治十三年ジョン・シ・バラによつて建てられ、のちの明治學院の前身となつた明石町のそれとは全く別のものなるこというまでもない(「明治學院五十年史」、七、五二——三頁、「日本基督教會史」、一五七頁)。

**明治六年三月十七日** 耶蘇教書肆鐵炮洲六番書庫開店(明治二年八月の項、同五年十月十五日の項参照)。

**同年三月三十日** この日曜日から福澤の塾でバイブルの説教を開始。

「鐵炮洲六番書庫日誌」参照。時間は午前八時より十時までの二時間で、聴講生徒二百六十名に及んだという(前掲拙稿及び次項引用文参照)。

**同年七月** 慶應義塾退任(明治五年六月一日の項参照)。

**同年十二月二十五日** 「眞神教曉」出版。

**同年十二月三十日** タムソン一派の無教派主義に對して日本長老會を組織す。

「日本基督教會史」(四一頁)、「日本近世基督教人物史」(一四四頁)、「明治學院五十年史」年表(三頁)、「明治文化史」宗教編(二九二頁)等参照。

**明治七年六月乃至十一月** 「天道溯源解」上(六月)、中(九月)、下(十一月)、三冊出版。

**明治七年十月十八日** 築地居留地内に東京第一長老教會創立、假牧師となる。

「日本基督教會史」(六一頁)はじめ、前掲小澤氏論文、「教派別日本基督教史」(五三、六四頁)、「日本近世基督教人物史」(一五一頁)、「明治文化史」概説編(三五九頁)、「西洋人名辭典」等参照。

因みに、この教會は明治九年四月二派にわかれ、一は銀座教會、一は露月町教會(のち愛宕下教會、芝教會と變遷す)となつた(「日本基督教會史」、六五、七九頁、「日本基督教史要」、一三三頁、「植村正久と其の時代」第二卷、一八三頁、「明治文化史」宗教編、二九一頁等参照)。もつとも、植村正久の所記によればこの教會分離は十年十月ともいう(「植村正久と其の時代」第二卷、一七二頁参照)。

明治八年一月 「耶蘇教大意」一、二、二冊出版。

明治八年四月六日 長老會の集りに出て會頭をつとめ、講演をする。

「日本基督教會史」(六三、六四頁)に引用する長老會記事参照。

同年四月 「性理略論解」上、下、二冊出版。

同年十月五日 長老會で耶蘇の呼稱に關し「ヤソ」説を主唱す。

理由は日本では一般にヤソと唱えているからというにあつたようであるが、このときの會頭タムソンの決裁で耶蘇なる漢字に「イエス」の假名をふることにきまつたという(「日本基督教會史」、六六頁に引用の老會記錄参照)。

同年十二月 「略解新約聖書」出版。

明治九年一月四日 臨時長老會で再び「ヤソ」説を提唱するも成らず。

これまた「日本基督教會史」(六六頁)引用の老會記錄参照。

同年四月四日 東京第一長老教會から分離して日本獨立長老教會創立。これが即ち銀座教會のおこりである。



「日本基督教會史」(六五、七九頁)、「日本近世基督教人物史」(一五二頁)、「日本基督教史要」(一三三頁)、「植村正久と其の時代」第三卷(六五四頁)等及び明治七年十月十八日の項参照。

### 同年春 築地大學廢校。同じく夫人のA六番女學校も廢さる(明治三年の項、同六年春の項参照)。

廢校理由は「日本近世基督教人物史」(二二四頁)ではカロザスが後述の廣島中學(英語學校)へ赴任するためとし、「女子學院八十年史」(三九頁)では夫人もやはりかれに同行して廣島へ赴いたと記している。したがって、その女學校の廢止もまたこのときらしく、在校生はそれぞれ同番地所在のB六番女學校や新たに銀座三十間堀岸通りに出來た原女學校に收容されたというが、同書の年曆(三三四頁)及び「明治文化史」教育道德編(二二九頁)ではこの廢校を明治八年としてある。

### 同年 長老會を退き、文部省に入つて御雇教師となり、十五年まで勤む。また、この年「馬可略解」出版。

このことは、さすが「世界人名百科辭典」、「西洋人名辭典」などにも明記され、十五年まで文部省御雇となつたことは「日本基督教會史」(六五頁)による。なお、かれの長老會退會の理由の一つはキリストに關する呼稱問題にあるものといわれ、自説が採用されなかつたからとされる(前掲小澤氏論文、「植村正久と其の時代」第二卷、一七二頁等参照)。

### 文部省御雇教師時代の移動

明治九年五月十七日より翌十年二月まで廣島英語學校在勤。

この點、「西洋人名辭典」にも一八七六年(明治九年)から七十七年(同十年)まで廣島英語學校に奉職したとあるが、東京府下居住外國人明細表」甲、乙によると日附までがはつきりし、本來の予定は九年五月十七日から十年五月十六日まで一年間であつたようで、同校が二月十四日廢校となつたため二月限り解約となつたものらしく、「東京開市と築地居留地」附表Aに明治九年五月御雇とあるのもこれに基づくものと思われる。

他方、前記東京都政史料館藏の資料乙によると、明治九年五月十五日から六ヶ月「ジュリヤカロルス女」が東京で渡邊信に雇入れられ、八月中に解約している記録がみられる。(この雇入れのことは、右の「東京開市と築地居留地」附表Aにもみられる)。明治十年五月一日より翌十一年一月まで大坂(阪)英語學校勤務。

これも前同資料により、本來は十一年二月二十八日までの筈であつたらしいが、任期にいたらぬ一月中に解約となつてゐる。月日までは書いてないにしても、「西洋人名辭典」がこの項も一八七八年(明治十一年)まで大阪英語學校奉職としたためたしかである。この大阪英語學校は間もなく明治十二年大阪専門學校となり、ついには第三高等學校へと發展したものである。

#### その後の消息

大阪英語學校退職後のカロザスの消息については、遺憾ながらいまのところあまりはつきりした資料を持合わせない。なんでも、小澤氏にうかがつたところでは、秋田、仙臺等を轉々して英語教師をつとめていたが、仙臺でなにか問題をおこしたとかいうこともある。そして、明治十六年になると、十一月二十日から翌十七年二月二十日までの間同人社の中村正直に雇われることとなり、これに関連してかれの居留地外住居願が十六年十一月十九日附で中村から東京府知事芳川顯正宛提出され、しかも、なぜかこれがたちまち解約となつて、同十一月二十四日附ではもう願書御下渡願が出されている。このことはまえにもふれた東京都政史料館藏「明治十六年私雇外國人管理錄件目」下の第四十七號書類(中村正直米國人シ、カラザース雇入開市場外住居ノ願書下戻願ノ件)で知られるのである。

さて、おわりにカロザスの人柄についてであるが、これはそれをしのばせるに足るさまざまな資料をそれぞれの立場からとりあえず大別し、いわゆる諜者報告に記されているカロザス、弟子たちの目にうつたカロザス、及びかれの在職當時恰度慶應義塾にいた人々に語られるカロザス等にわかつて、それからかれの経歴、事績を通してうかがわれる性格につき述べてみることにしよう。

その第一、諜者報告によると、このなかには「猾狡暴惡」「至貪至慾」といつたはげしい言葉も出てきたりして、報告者の立場上もちろん多少の誇張は免がれないにしても、とにかく人物としてはカロザスの評判あまり香ばしからず、「鐵炮洲六番書庫日誌」明治六年四月十一日の項にみられる左の記述などその最もよい例といえよう。すでに、小澤氏の論文（「慶應義塾御傭教師Cカロゾルス」）にも掲載されているものではあるが、そのまま引用してみる。「宮城縣下ノ老人<sup>年齡五十</sup>ト書生<sup>年齡廿才余</sup>」の兩人に對し、「高知縣士族トテ年廿八九斗ノ人」が語つたという話の報告で、そのうちにこの惡口が出てくるのである。

然ルニカルロテス杯ハ先生方ノ見ル通り如是高大美麗ナ家作ヲシ剩ヘ居宅耳ナラスニケ處モ普請ヲヲシ<sup>(マ、)</sup>大工作官杯少シノ間ヲナセハ鞭ヲ以テ之ヲ打チ其上ニテ雇金ヲ引ク少モ愛人如己ノ氣色ハナク已テニ外國ヨリ居留ノ大工ノ棟梁ヲ充分骨ヲ折ラセ過半成就ノ上終ニ喧嘩ヲ始メ給料ヲモ遣ラス不平ノマ、斷リタリ其猾狡暴惡推テ知ル可シ又側カニ聞ク久ク福澤ノ塾ニ通ヒ毎日一字ヨリ四字迄二月給百八十金夫モ己レノ他用アレハ不<sup>レ</sup>行<sup>カ</sup>シテ月金ハ全分取レリ追々福澤ニ教師部屋出來レハ妻ト共ニ引越跡ノ居宅ハ二家ナカラ借家トシ家賃大金ヲ貪ルノ策ト聞ク之レ今日ハ今日ニ量リ明日ハ明日ニ量ルト云ヘキカ實ニ至貪至慾ト謂ツヘシ云々（「幕末明治耶蘇教史研究」、三六五——六頁）

ずいぶんと辛竦ではないか。それで、小澤氏もさすがこの話をそつくりとは信じられないらしいけれど、それでも、「然しこんな評判を立てられた彼にも、何等かの不用意が有つたのだらう。」（「明治文化」第十六卷第十號、一八頁）と斷じ、福澤諭吉が同じ宣教師D・B・シモンズによせた情誼の厚さと比べて、カロザスの場合いかに違いがあるかを指摘しておられるが、まことにその通りであると思われる。福澤は右のシモンズ以外にもA・C・シヨウ、W・デニング、A・ロイド、A・M・ナツプ、C・マコーレー等々多くの外國人とかかなり親密な交遊關係を結んでおり、それを示す資料は決して少くないが（これらの詳細についてはもちろん他日にゆずるほかない。けれど、なかでもナツプやデニング等との關係については拙稿「宣教師ナツプと福澤諭吉」——「史學」第二十七卷第二・三號所載——及び「デニング英大使の父と福澤先生」——「新文明」第四卷第一號所載——等を参照せられたい）、カロザスに關する限りはそうした事情をうかがわせる資料に殆んど全く接しない。接觸の期間の短かつたこともあるかも知れないし、まさか慶應義塾でのかれの勤務ぶりまでが右にいわれるほどそうひどいものとも信じられないけれど、カロザス自身の性格のうちに多分に人からうとまれやすいそうしたきつさのあつたことも容易に推測されるのである。

このほか、「東京邪宗事情」（明治五年正月、二項既述のものにつづき）にみる「美々敷宅ヲ造リ夫妻共ニ務メテ和語ヲ學ヒ一節英語教授ト稱シ書生ヲ集メ盛ニバイブルヲ講セシニ洋學書生バイブル素讀制禁ノ令アリシ其時バイブルノ外教ヘズト云フ云々」（「明治文化」第十六卷第十號、一五頁）といった報告、「東京横濱耶蘇教事情書」（明治五年十月）にみる「一カロデス近頃學校ヲ建立シ當十五日ヨリ開講毎日バイブル而已教授スル由又書庫ヲ建テ宗書ヲ國中ニ賣捌ク卸シ所トスルノ志願此頃普請最中ナリカロデス云ク此地日本ノ大都ナレハ法教モ此東京ヲ本トセネハナラヌ云々」（同、一五頁）

といった報告、「鐵炮洲六番書庫日誌」（明治六年三月三十日の項）にみる「カルロテス此日曜日ヨリ福澤ノ塾ニテ午前八時ヨリ十時迄「バイフル」ノ説教ヲ始ム同人歸テ生ニ咄テ云ク今日福澤ニテ廣大ノ席ニ生徒二百六十人ヲ集メ説教セリトテ意氣揚々トシテ語レリ云々」（前掲書、三六二頁）といった報告（いずれも傍點は筆者）はいわばみなそうしたかれの性格の強さ、積極さを裏書きするものといえはいえるのではあるまいか。因みに、かれが夫人とともにつとめて和語を學んだというのは、後述の原胤昭の談話によれば、先生はのちに日本橋日基督教會の名牧師となつた北原義直で、そのおかげでカロザスもすこしは日本語がわかつたらしい（「植村正久と其の時代」第四卷、八三——四頁參照）。

これに對し、いわゆる弟子たちのカロザス觀には當然もつと身近かな見解があつていい筈で、たしかにそれもないではないが、一方ここにもかなり痛烈な批判のあることはいかにも注目されよう。その一つは、これまでも再三引いたが、明治七年（日附は「更生保護の父原胤昭」の年譜によると二月二十八日とあり、「植村正久と其の時代」第四卷、七〇頁には十月十八日と記して不同であるが、とにかく）カロザスから洗禮をうけた原胤昭の懷舊談（「基督教古文献賣出し時代の思ひ出」で、それにかねはこういつてゐるのである）。

私に洗禮を施してくれたシイ・カロゾルス氏私の口から左様云ふのも如何ですが、極めて野卑な且つ武骨な人物、面貌、猿に似てモンキイ／＼のあざなを博して居た。勿論學力も覺束無かつたらしい。信仰も何んな事であつたか。唯だ執るところは剛情と熱誠頑健だ、或る大降雪の朝、住宅西洋館のトンガラカツタ屋根の積雪を掻き卸せと、三人のボーイ、コックに命じた。彼らは屋根がけわしいのに恐れて主命に應じない。屋根へ上がれ上がれ無いと口論した揚句、日本バカと怒鳴り立てた。そんなら毛唐あがつて見ろ。賣り詞に買ひ詞、さんざ怒鳴り合つて、カ氏は自ら屋根

に登つた。見る間に落下した。アレツと云ふに、阿修羅の如くまたも登つた。と毎度カ氏の剛情性を語る證言に出たので笑つた。云々（「植村正久と其の時代」第四卷、九四頁）

信仰の點はたしてどうか知らないが、せめて學力の方は經歷の項にも述べた通り一應シカゴ大學を出ていることだし、全くとめられないこともなからうと思われるのに、だいぶ手きびしい評言で、結局のところは人物という點で「カロザルス氏は、どうも感服の出來無い人格者であつた。」（同）ということになつてゐる。弟子の言にしてこれではいいようもなからう。一方同じ門下（明治七年十月受洗、「日本基督教會史」、六一頁）の逸材とうたわれる田村直臣は

カロザルス教師は、實に勤勉な働手であつたが、ヘボン。ブラオン。フルベツキ。タムソン教師の如き君子然たる風采はなく、又學者肌の人ではなく、百姓丸出しと云ふ様な風貌の人であつた。さうして、人格に於ても、強情で人を免す事の出來ない性質を有して居つた。云々（「明治文化」第十六卷第十號、九頁）

という。さすが、表現は原ほど露骨ではないけれど、語る内容は大差あるまい。また、カロザスから洗禮をうけたり學んだりした人々は、このほかにも慶應義塾關係を除いてもまだまだ決して少くなく、これまた明治七年暮かれから洗禮をうけたという渡邊かめ子（「女子學院八十年史」、六五頁參照）とか、なかには伊澤修二（明治三、四年ごろのことか、築地にカロザスの教えをうく。「樂石伊澤修二先生」、一七頁參照）、都筑馨六（明治七年八月二十九日から翌八年九月二十八日まで一年間、築地のカロザスの塾に學ぶ。「都筑馨六傳」、二九——三〇、年譜五——六頁參照）、長田時行（明治七、八年のころか、カロザス經營の築地大學に修學す。梅花女子專門學校・同高等女學校「創立六十年史」、二八三頁參照）のような人々もいたのであるが、これらにはいまカロザスについて特にここにとりあげるほどの話ものこつていない。

それから、第三、慶應義塾のものたちのカロザス観であるが、これにはかれに非常な敬慕をよせていたく傾倒していたらしい學生が一人いる。明治四年八月三日入塾した加藤木重教（「入社帳」三、七四葉表。入社當時の姓名は山崎六三）で、その語るところによると、カロザスはあくまで溫厚な「ゼントルメン」で、この十五才の東北出の童兒生にとり、カロザスから教わるのはまるで親から教えられるような氣がしたということである（「慶應義塾基督教青年會三十年史」所載「初めて聖書を見たり」、四五頁及び同書二三三頁ほか「重教七十年乃旅」前篇、五四頁等參照）。（これに反し、同じくカロザスとともに義塾にあつたグードマンはあまり生徒から尊敬されていなかったとか。「重教七十年乃旅」前篇、四五頁）。そして、當時たしかに一部の塾生間にはその影響をうけて多少のキリスト教熱を催うし、日々築地に通つてカロザスにつきバイブルの講義をきいたり讃美歌をうたつたりしたもの（濱野定四郎、高嶺秀夫、後藤牧太、朝吹英二、瀬谷鉞三郎等、それに、前掲の加藤木談では四屋純三郎もこれに加えられよう）もあらわれ（「慶應義塾五十年史」、一三八頁）、ついには洗禮をうけるまでにいたつた瀬谷鉞三郎、岩田（蕃）、八木澤（直澄）等（「三田評論」第二三五號所載、須田辰次郎「義塾懷舊談」（四）、五一頁參照）もあれば、カロザスのもとにしばしば聖書を買に行つた塾生（前掲拙稿引用の「鐵炮洲六番書庫日誌」參照）もあつたようであるが、それらにむしろカロザスその人をしたうというよりはいわば新しいキリスト教への關心であつたのではあるまいか。こうした人々のカロザスについて記したものはなにもみられないのである。別に明治三年十一月八日入塾した栗本東明（「入社帳」二、二二葉表。當時は龜五郎といった）もカロザスの義塾にきたころ在塾したといい（「三田評論」第二五八號所載、「義塾懷舊談」、六九頁）、同年十一月二十四日入塾したのちの齒科醫高山紀齊（「入社帳」二、二二五葉裏。當時は彌太郎という）もまたカロザスに英學を修めたといわれるが（「現今日本名家列傳」、三一五頁）、やはりカロザスについてはなにも語つていない。しか

し、右の加藤木の談は私情としてはたしかにうるわしいものがあるとはいえ、小澤氏もそれを評して「少し美化されてゐる様な氣もするが」（『明治文化』第十六卷第十號、一四頁）と述べているごとく、年をへだてていささか恩師に對する思慕の情をかざりすぎた感がありはしまいか。加藤木はさらに昭和二年二月五日慶應義塾基督教青年會の卒業生送別會でも往時を懷古し、カロザスの努力をしのんで感謝にたえぬ旨を述べている（『慶應義塾基督教青年會三十年史』、二三三頁）。

これを要するに、くりかえしていうようだが、はじめにあげた原が「カ氏は至て下品な白人、殊に其面貌悉く猿猴に似て居た。私ども心易い者の間では、モンキイ／＼と呼んだ。云々」（前掲書、八八頁）といい、そのころやはりバイブル・ソサイティから派遣されてきたルミスなるものと比較して「雪と炭ほど違ふ人間だつた。」（同、八三頁）といつてゐるのが多少いいすぎはあるとしても、とにかくカロザスという人はどこか普通人とはかわつた圭角のひどい人柄であつたものと思われるのである。しかも、そのことは現に、前述のかれの經歷を瞥見しただけでもほぼ裏書きされるものともいえないか。仕事は非常に熱心で、意慾も相當にさかんらしく、それなりになかなか活潑な動きをみせてはいるというものの、反面とかく他人との調和を缺くらみなしとせず、結局は教會とさえもたとを分つてゐる仕末なのである。剛情といわれる所以であらう。まだ三十代の血氣にもえた時代のことといえ、そうもいえるかも知れないが、もちろんそれだけのことではなく、むしろこれがかれ自身のうちに存する性格のあらわれであつたものである。

本稿はさきに本誌（『史學』第三十卷第三號、昭和三十二年十二月刊）によせた拙稿「慶應義塾のカロザス雇入れについて」につづく。したがつて、これが慶應義塾學事振興資金の昭和三十年度前期研究補助による報告の一部をなすこと、その他みな前稿に準ずる。挿入寫眞も同様慶應義塾史編纂所勤務の佐志傳氏撮影にかかるものである。